

令和6年度 第1回加古川市総合教育会議 議事要旨

- 1 開催日 令和6年8月1日(木)
- 2 開催場所 SHOWAグループ市民会館大会議室
- 3 出席者 加古川市長 岡田 康裕
教育長 小南 克己
教育委員 溝口 繁美
教育委員 播 穰治
教育委員 坂元 裕美子
教育委員 土屋 光世
- 4 傍聴人 8人
- 5 議事の要旨
 - 開会 午後2時
 - 会議公開の可否決定のこと
全ての議事を公開することに決定
 - 議事録署名委員指名のこと
小南教育長を指名
 - 岡田市長あいさつ
 - 協議事項
 - (1) 第4期「かがわ教育ビジョン(教育振興基本計画)」について
(小南教育長)
 - ・「かがわ教育ビジョン」については、本市の教育の方向性を示す大切な計画であり、令和7年度から11年度にわたる5年間の計画を今年度策定する。
 - ・6月25日に開催された第1回目の教育ビジョン検討委員会では、10名の委員の方々から非常に多様で貴重なご意見をいただいた。本検討会については、合わせて4回実施し、その内容を基に教育ビジョンを策定していく。
 - ・また、実りのある計画にするには、教職員や保護者を含め、地域の方々にもこの教育ビジョンの内容がしっかりと伝わるのが重要である。そのためには、今後、市長部

局の方々にもご協力をいただきたいと考えている。

<事務局（教育総務部長）から資料に基づき説明>

（岡田市長）

- ・今後の本市の教育に関する方向性を決める大事な計画のため、私から盛り込んでいただきたい内容や考え方について協議させていただくとともに、皆様からも、ぎっくばらんにご意見をいただきたい。
- ・教育ビジョンは国や県の教育振興基本計画を参酌しながら策定するものであるが、加古川市版を策定することの意義は、「加古川らしさ」や「加古川ならではの」が入っていることが重要であるとする。
- ・現在、市では「加古川ならではの魅力づくり」を進めており、人口の奪い合いなどの自治体間の競争ではなく、市の魅力により、市民一人一人の幸福度の向上を目指しているところである。
- ・自分自身の履歴書の一部とも言える出身地、ゆかりのある地、縁のある地である加古川が素晴らしいものであると感じられるよう、地域に対する愛着、誇りをもってもらいたいと考えているが、教育ビジョンにおける位置づけや、委員の皆様のお考えをおきかせいただきたい。

（溝口委員）

- ・私は市外に住んでいるが、市外の者から見て加古川市は文化、歴史など古くから残してきた、あるいは継承してきたものが非常に多くあって、子どもにとっては素晴らしい環境であると思っている。先日も市内を歩いていると、あかりの鹿児島資料館という場所に会い、入ってみるとNHKの朝ドラをテーマにした展示を実施していたり、入口付近には加古川中学校の生徒がトライやるウィークの活動で作成した絵はがきのような作品が貼ってあったりと、大変興味深いものであった。
- ・他にも市内には鶴林寺の国宝や平荘湖、古墳などもあるが、どう活用していくかという点において少し工夫がいるのではと感じている。
- ・普段、暮らしているだけでは、自然や文化・歴史に直接触れる機会が少ない中で、小中学校の授業の中で、直接見たり聞いたりできる自由な時間を確保することも必要なのではないか。

（播委員）

- ・地元愛を深めるためには、社会の副読本「わたしたちのまち加古川」で勉強してもらうことも大切であるが、先ほど溝口委員も述べたように、まちに出て実際に文化や歴史に触れるということが非常に重要であるとする。

- ・また、勤労の大切さや、ふるさとの方々の温かさを知っていただくためには、トライやるウィークは非常にいい機会であると思う。
- ・ある調査では、子どもたちが興味を持っている職業で言えば、医療分野や公務員、あるいは教員が上位である。
- ・市内には、全国的に見ても業績の良い加古川中央市民病院や市役所があるが、見たことのない子どもたちもいる。このような施設を訪れ、実際に働く方々を直接見てもらうことで、ふるさとのことを知ってもらい、ふるさとで働いてみようかと考える子どもたちが出てきてもらいたい。

(岡田市長)

- ・溝口委員や播委員がおっしゃるように、加古川の魅力、特色というのを子どもの時期に直接知ってもらうことが、重要であると感じている。
- ・先ほども申し上げたように、加古川ならではの魅力づくりということで、駅から近い広大な河川敷で楽しく過ごしてもらえよう、かわまちづくりを実施しているところであるが、自分が生まれ育ったり、仕事で滞在していた地域が、褒められたり、関心を持ってもらうことで、加古川を誇りに思ってもらえると考えている。
- ・このような環境整備を通じて、子どもたちには自然や文化に触れる機会を増やしていきたい。また、授業日程が非常にタイトであることは承知しているが、ぜひ、子どもたちが直接見聞きできる機会を設けていただきたい。

(土屋委員)

- ・加古川ってどんなところって聞かれた時に何もない普通のまちと答える方が多いと聞くが、そうではなく、加古川はこういうまちだ、と誇れるようになって欲しい。学校だけではなくて、地域、保護者との関係を深くし、ぜひ、自分のふるさとの良さを伝えられる子どもになって欲しい。

(坂元委員)

- ・私は以前、市外に住んでいたが、加古川市に住んで1番印象強いのは加古川である。先ほど市長が、かわまちづくりの話をされていたが、加古川市ほどの規模のまちで、大きな川が流れ、生き物が多いまちは珍しい。私自身、鳥が好きであるが、加古川はその種類も多く、他市とは全然違うと感じる。
- ・子どもたちが自然の中で活動することや、理科の授業などでも加古川は活用できると考えるので、ぜひそういった自然をうまく活用して欲しい。
- ・また、小学校でも中学校でも、加古川市に関する資料が作成されており、小学校では3年生で学ぶ機会はあるが、中学校では、どの程度活用できているのか。ぜひ中学校でも活用いただければと考える。

(岡田市長)

- ・ 様々なご意見をいただき、委員の皆様とも方向性は同じであると感じている。ぜひ、第4期教育ビジョンの策定の中で、ふるさと意識の醸成や地域とのつながり、自分たちのまちについて学ぶ機会の確保など、方向性を示していただければと思う。

(岡田市長)

- ・ 次に、子どもを取り巻く環境については変化が激しく、10年後にはどのようなスキルが社会で求められるのかは見通しにくい状況である。このような状況だからこそ、子どもたちが、早い段階で自分のしたいことを見出せることが重要であると考えます。
- ・ そのためには、子どもたちが自信や、こうしたいと思える原動力を持つことが必要であり、ウェルビーイングの視点が次の教育ビジョンでは重要であると考えますが、意見をお伺いしたい。

(小南教育長)

- ・ ウェルビーイングの向上については、市としての大きな方向性の一つであると認識している。
- ・ 一方、加古川市の全国学力学習状況調査の結果を見ると、県平均や全国平均と比べ、自己肯定感が高い状況である。また、教員に対しての信頼関係についてもポイントが高く、教員に対して信頼を寄せているという結果が出ている。
- ・ このような点をさらに伸ばしていき、子どもたち一人一人が安心して自分らしい生活を送れる、自分の目標を立てることができる。そのような結果をさらに伸ばしていければと考えている。

(岡田市長)

- ・ 全国学力学習状況調査において、自己肯定感に関係するような項目で高い数値が出てきているということは、本当に素晴らしいことである。
- ・ 協同的探求学習等を進めてきていただいた成果が出ているのではないかと。引き続き、自己肯定感に関係する項目を伸ばしていただきたいと思います。
- ・ また、学力の平均点など基礎的な教養をしっかりと身につけておくということも大事である。
- ・ 基礎的な学力についても、しっかり抑えつつ子どもたちが自分のしたいことを見出すことも合わせて応援していく教育を行っていただきたいと思います。
- ・ なお、国の教育振興基本計画においても、日本社会に根差したウェルビーイングの向上という記述がある。ぜひ、市の教育ビジョンでもウェルビーイングの考え方を盛り込んでいただきたいと思います。

(岡田市長)

- ・次に、持続可能な社会をどのように実現していくのか、ということも私たち公共の立場としては特に重要な項目である。
- ・日々の生活を送るうえで、自分の今の状況をどう改善していくかということは大事ではあるが、一方で将来世代に対して、持続可能な社会、地域社会を引き渡していくことについて、みんなで考えていく必要がある。
- ・持続可能な社会を実現していくためには、小学生・中学生の頃から学んでいくべきであると考えているが、教育ビジョンの中でどのように位置付けていく予定か。皆様の考えをお聞かせいただきたい。

(溝口委員)

- ・SDGsには様々な課題があり、その課題に取り組んでいる企業や団体も多い。大学や高校でも関心は高く、幅広い層にSDGsの考えが広がりつつある。民間企業や団体と連携し、取組を行うことも1つの方法であると考えている。
- ・学校ではどうしても教員と子どもたちだけの世界になってしまいがちなところがある。地域との連携は進んでいる印象はあるものの、もっと視野を広げて他の団体と連携してもいいのではないかと考える。
- ・また、加古川市では県立農業高校、県立東播工業高校もある。民間企業や団体との連携が難しければ、市内の高校と繋がることで、更にSDGsの取組が深まるのではないかと考える。

(小南教育長)

- ・溝口委員からの発言に関連して、現在の取組を紹介させていただく。
- ・各公民館で県立高校にお願いをし、小学生の夏休みの宿題を高校生に教えてもらい、理解を深めていく取組を実施しているところである。
- ・今年は、公民館に加古川東高校、加古川西高校、加古川北高校の生徒たちが参加してくれている。また、加古川東高校については、東加古川公民館・かこてらすで理科の実験を行い、子どもたちの理解を深める取組を去年から始めているところである。
- ・また、加古川市の課題に対して高校生が研究し、プレゼンテーションを行い、それを評価する取組を実施しているところである。
- ・東播工業高校については、建築科の学生が毎年のように課題研究を実施している。旧加古川図書館について、3Dプリンターを用いて模型を作ったり、本岡家住宅についてはVRを活用し、建物の内部がどこでも見られるような取組を実施いただいている。今年は尼塚古墳の調査をしていると聞いているが、そのような取組をさらに広げていき、小中と高校の連携が更に進むように充実できればと考えている。

(岡田市長)

- ・ 今日も暑い日になっており、温暖化等の環境問題もSDGsの重要な課題である。特に小学生や中学生であれば、環境系のテーマが理解しやすく、理科の授業などを活かして、社会課題を学んだり、高校生の方々と触れ合うことでより深い理解を得ることができるのではないかと思う。
- ・ 民間企業の先進的な取組について知ることも重要である。また、その取組を知ることによって、地域愛の醸成にもつながるかもしれない。そういった機会をぜひ持っていただきたい。
- ・ 若い時こそできる限り、様々な体験に触れる機会を作ってあげてほしい。そのことを通じて子どもたちが、2つ、3つでも興味を持ち、その方向性を自分の進学先とか就職先に活かしていくことができればと思うので、ぜひそのような考えを教育ビジョンに位置付けてほしい。

(岡田市長)

- ・ GIGAスクール構想の取組が国の旗振りで行われており、本市でもすでに始まっている。先生方も新しいICT技術を使いこなしている方、まだまだ試行錯誤の方、あまり使われていない方もいると聞いており、まさに過渡期であると認識しているが、もっと使いこなしていただいて、いい学習環境を作ってほしい。
- ・ 期待することは、ICT技術をうまく活用することで、機械に任せられるものは任せながら、先生方には児童生徒一人一人にしっかり向き合う時間が取れるようなステージまでもって行っていただきたい。
- ・ 一方で、協同的探求学習については、子どもたちに対して課題を投げかけて、それぞれの考え方、生き方をお互いにシェアをし、みんなで理解を深めていこう、広げていこうという風な取組だと思う。
- ・ 今後は、ICTと両立させ、それぞれの良さを活かしていくことも重要であると考えているが、委員の皆様からの思いなどを聞かせていただきたい。

(土屋委員)

- ・ 先生方だけではなく、配付している端末を使ってどんどん先に行く子どももいれば、まったく端末を使えていない子どももいるのではないかと心配している。
- ・ 子どもたちの習熟度についても、丁寧に把握しながら取組を進める必要がある。

(播委員)

- ・ ICTの活用は非常に大事ではあるが、私自身もZOOMでの講演会と、直接講演会を聞くのでは、伝わり方が違うと考えている。学校の先生方においても、教えるということに関しては、ご自身の言葉というのが非常に重要であると認識いただき

い。例えば、英語の教科書に記載している会話については、スピードが調節できるが、単にスピードが違うだけであって、実際に外国人の方が話す場合は、スピードだけでなく、聞こえ方も全然違ってくる。

- ・そういった意味では、先生方の役割は決して少ないものではないと思っている。

(坂元委員)

- ・子どもたちの意見の集約等は断然 ICT が得意とするところだと思うが、新しい授業の方法を模索する必要もあり、先生方の負担になりすぎないか心配である。ただ、ICT を使いこなせるようになれば、その先に新しい展開があると期待している。
- ・また、子どもたちの端末の使い方に関しては、できるだけハードルを下げたい。学習障害の子どもたちに会うことがあるのだが、読み書きが難しい子どもにとっては、今の使い方のルールはハードルが高いように思う。端末の使い方によっては有効な使い方ができるのではないかと考えている。

(溝口委員)

- ・私もコロナ禍で大学の授業をリモートで準備する際、相当苦労した経験がある。世代が変わっていけば当たり前なものにはなると思うが、現実的には先生方の負担があるということ認識しながら取り組んでいく必要がある。

(小南教育長)

- ・現在、過渡期中で ICT を取り入れた授業づくりに苦労している先生がいることは認識しているが、私は、一斉授業という今までのやり方について、真剣に考えていく時期だと考えている。
- ・文科省が 2022 年に実施した「義務教育に関する意識に関する調査」では、小学生 4 年生の約 3 割弱の子どもたちが授業を難しいと感じている。一方で、授業の内容が簡単すぎると感じている子どもも約 3 割弱となっている。一斉授業の中で自分のその能力にあった授業をしてもらっていると感じている子どもは 44.5% という結果が文科省の調査で出ており、今まで 35 人から 40 人を対象にやってきた一斉授業のデメリットが明らかになった調査であると思っている。
- ・定数を減らして授業を行うことが最も効果的な方法ではあるが、教員不足や財政状況からそのハードルは高い。そうすると、ICT 技術を使っていろんな形に個別に最適化することや、協同的探求学習を推進していくツールとして活用していくことが必要であると感じている。
- ・一方、溝口委員がおっしゃった過渡期における課題をどうクリアしていくのかという問題はありますが、これまでの課題を認識いただき、学校現場の先生方一人一人に対して変化が必要であることを意識付けする必要があると考えている。

(岡田市長)

- ・ G I G Aスクール構想がコロナ禍で前倒しになり、 I C Tの利活用が急遽進められた中で現場の先生方の苦労については、計り知れないものであったと思うが、今後はできる限り対応していく必要がある。
- ・ 今後も引き続き、 I C T技術の利活用に関する研修やサポート体制を充実させていく。予算が必要な点については市長部局もしっかり理解をしながら一緒に取り組んでいきたい。
- ・ また、教育長から説明があったように、現在の教育の課題が浮き彫りになっている中で、 I C T技術は使い方次第では様々な可能性があると考えている。
- ・ オンライン英会話も始めていただいているが、 A L Tも人件費の高騰で運営が大変であった。その際に、オンライン英会話で楽しく、リアルに近い形で、効率的にできればそれに越したことはないと思う。
- ・ また、 G T E Cスコア等も用いながらスキルの確認も図っていると聞いているが、大学入試等でも、リスニングやスピーキングの割合もますます大きくなってきている。社会に出て使える英語にしていくためにも、加古川市が先駆的にチャレンジをしていって欲しい。

(岡田市長)

- ・ 次に、いじめ防止対策についてであるが、過去に起きてはならない事案があり、今も引き続き力を入れて取り組んでいる項目である。
- ・ 現場でも緊張感を持って取り組んでいただいているが、担任の先生が何十人という生徒を見なければいけない中で、単なる冷やかしかからかいでは済まないような子ども同士の摩擦のようなものは、まだまだあると認識している。
- ・ いじめ防止対策改善基本計画も策定し、未然防止や早期発見・早期対応に取り組んでいただいているとは思いますが、教育ビジョンを策定するうえで、皆様のお考えやご意見をお聞かせいただきたい。

(播委員)

- ・ 最近では表面的なものではなく、 S N Sを介したいじめもあり、非常に見つけにくい状況である。先生方もご家庭でも、できる限り子どもたちとコンタクトをとって、子どもたちの話をよく聞いて欲しいと思う。

(岡田市長)

- ・ 播委員がおっしゃった S N Sでのやりとりは、先生方も気づけない、気づきにくいところであると思う。そうであるからこそ、子どもたち自身が気付いた時に勇気を出し

て先生に伝えてくれるような行動ができる人になってもらうような取組が大事であると考えている。

- ・児童会や生徒会が中心となって「心の絆プロジェクト」に毎年取り組んでいるが、ぜひ、継続して実施して欲しい。
- ・また、教育委員会では専門家によるチームを組織し、様々な支援をいただいている。そのような取組について何か課題やご意見があればお教えいただきたい。

(小南教育長)

- ・加古川市では、いじめ重大事案等のケースについては、第三者として弁護士の方に入っただく仕組みを構築している。中立的な立場で各事案を見ていただき、昨年度についても非常に効果的なご意見をいただいた。
- ・一方、県が配置しているスクールカウンセラーの数が少ないという現状がある。非常に重要な役割を担っていただいているが、大規模な学校であると2か月後でしか時間が取れないといった現状がある。
- ・スクールソーシャルワーカーについても同様で、これまでの学校にはいなかった専門家の方々のボリュームが圧倒的に少ないことが大きな課題であると思う。今後は国や県に対し、こうした専門家の方の配置を増やしていただくことを強く要求していきたい。
- ・また、より効果的な相談体制を整えるために、市の予算で支援員の中にこのスクールカウンセラーのような役割を担う心理士の方や、ソーシャルワーカーを配置しており、更なる強化をしていただけるとありがたい。

(岡田市長)

- ・県においてもメンタルサポーターの増員をしていただいたが、十分ではないと考えている。我々も市でできることを積極的に取り組みつつ、最低限の人員配置は国や県に要望し、先生方が児童生徒にしっかり向き合える教育環境にしていけないといけない。

(岡田市長)

- ・次に、いじめ防止対策と関連する項目であるが、不登校児童生徒への支援も大きな課題になっている。市役所北館のわかば教室のリニューアルや、わかばサテライト教室の設置、また、メンタルサポーターの増員等を市としても進めているが、皆様のご意見等をお伺いしたい。

(溝口委員)

- ・先日、トーキョーコーヒーという不登校の児童生徒の増加に向き合うプロジェクトに

参加した。不登校の子どもたちの親が集まれる場を作っており、まだ始まって間もないプロジェクトである。

- ・このような背景には、不登校の子どもを抱えながらも、どこにも相談ができない親が増えているという現状がある。そのような親に対する支援も必要なのではないか。
- ・子どもが不登校の時期を経験して、今は社会に出て生活しているというご家庭もある。そのような経験をされた方を学校に招き、保護者の方と気軽に話をする機会をつくり、繋がれる、相談できる雰囲気醸成していくことが必要なのではと考えさせられたところである。

(岡田市長)

- ・溝口委員からお話しいただいたように、不登校児童生徒への対応について、保護者同士が情報を共有できる機会の重要性を改めて感じている。
- ・先日、職員から薦められた不登校に関する書籍を読み、自分自身も何が正しい対応なのかを模索しているが、結論としては、ケースバイケースであり、明確な正解はないと感じている。
- ・私たち親世代はどうしても「学校に戻るべき」という考えを持ちがちであるが、子どものそれぞれのペースに寄り添い、温かく見守ることも重要であると感じている。
- ・いずれにしても、保護者が焦らずに対応できるよう、情報交換の場や、支援体制を真剣に考え、取り組んでいかなければならない。

(小南教育長)

- ・現在、不登校の保護者が集まる「あすなろ会」を開催しているが、その場に参加する保護者の中には、遠方で参加が難しい方もおり、改善の余地があると感じている。そこで、公民館などのサテライト会場を利用し、子どもと保護者が一緒に相談できる場を提供することも検討していきたい。
- ・また、不登校で悩む保護者への支援は非常に重要であり、その充実を図るために具体的な対策を進めるべきだと考えている。
- ・不登校を乗り越えた経験を持つ保護者を相談役として活用し、現在同じ問題に直面している親への支援を強化することが有効だと考えている。

(岡田市長)

- ・ぜひ、そのような形で対応を検討いただきたい。

(岡田市長)

- ・次に、部活動の地域移行について、現状の関心の高さを強く感じている。私自身、地域移行がどう進んでいるのか、どのように進展しそうなのかといった質問を頻繁に受

けている。

- ・この移行は、教員の働き方改革の一環としても確実に進めるべきだと感じているが、現実には施設の整備や改修、人材確保、そしてその人件費の負担をどう分担するかなど、解決すべき課題が山積している。一方で、少子化が進む中で、集団スポーツの運営が難しくなりつつある現状も認識しており、広域的な連携や複数の学校での共同運営が今後の課題だと考えている。
- ・教育委員の皆様におかれましては、この問題をどのように考えておられるのか、ご意見を伺いたい。

(坂元委員)

- ・部活動の地域移行について、個人的な感想になってしまうが、中学生が学校と家だけの生活に縛られている現状に、長い間疑問を感じてきた。自分の中学時代を振り返っても、部活動に多くの時間を費やし、他の大人や社会と接する機会がほとんどなかった。当時は不満があったわけではないが、社会人となって次第に「もっと異なる形があるのでは」と思うようになった。
- ・今の子どもたちは、親戚や社会人とのつながりが薄れ、具体的な人と直接触れ合う機会が非常に少ないと感じている。部活動の地域移行は、子どもたちがさまざまな大人と接する絶好のチャンスだと考えている。
- ・また、部活動が競争や全国大会を目指すことに偏りがちであるが、もっと広い視野で、子どもたちの人生全体を見据えた活動を考えるべきだと強く思っている。海外の地域クラブや趣味の活動のように、多様な取組を取り入れられる可能性があるを期待している。
- ・実現するのは困難だと思うが、それでも挑戦する価値があると考えている。

(岡田市長)

- ・坂元委員のお話を聞いて、部活動は必ずしも文化活動やスポーツ活動に限定されるべきではないと感じた。
- ・特に、大学の推薦入試や英語入試を意識する際にも、自分の幅を広げたり、アピールポイントを作るためには、他の活動も重要だと感じている。例えば、知り合いの子どもは夏休みに福祉施設でボランティアを行っているという話を聞いた。
- ・スポーツや文化活動に限らず、社会と関わる機会を持つことも選択肢の1つであり、個人の選択肢として尊重されるべきだと考える。

(播委員)

- ・社会活動の重要性は理解しているが、不登校の原因として、中学校での学業不振が大きな要因であることが気にかかっている。だからこそ、学業以外の分野で子どもたち

が自信を持てる力を伸ばすことが、本当に大事だと感じている。運動や他の活動を通じて、子どもたちが自分の価値観を信じられるようになることが、子どもたちの成長にとって不可欠だと思う。

- ・ただ、少子化や働き方改革の影響で、すべての部活動を広く支援するのは現実的に難しいと感じている。それでも、野球、サッカーといった、比較的裾野の広い分野に絞って支援を行うことには、十分な意味があると考えている。限られたリソースでも、しっかりと子どもたちを支えていただければと思う。

(溝口委員)

- ・部活動は個人的にとっても大切だと感じている。自分も顧問として一生懸命取り組んできたことで、子どもたちとの深い繋がりを築けたし、多くを学ぶことができた。しかし、最近の若い先生たちの中には、部活動を持ちたくないという声が多くなっていて、無理に続けさせるのは現実的ではないと感じている。
- ・だからこそ、旧来の部活動にこだわらず、新しい発想で地域移行を進めるべきだと思う。中学生の希望を聞くと、バドミントンや料理など、従来の枠にとらわれない活動を求めている。例えば、地域の農業や福祉施設でのボランティア活動を部活動として取り入れるのはどうだろうか。そうした活動を通じて、子どもたちに新しいチャンスを提供することができると思う。
- ・また、規模の小さい中学校では、生徒たちが学期ごとにやりたいことを相談して決める部活動の形もある。こうしたアイデアを活かして、子どもたちが本当にやりたいことを実現するための新しいステップに進むべきだと強く感じている。これを単なる移行ではなく、次の可能性を広げる機会として捉えることに意味があると思う。

(土屋委員)

- ・部活動の地域移行について、最初は、今の部活動をそのまま誰かに引き継いでもらうという単純なイメージを持っていた。しかし、見ていくうちに、部活動のあり方自体を根本的に変えなければならないと強く感じるようになった。
- ・これは大きなチャンスだと思うし、働き方改革の観点から見ても、これは絶対に必要なことである。加古川市はこの機会を最大限に活かして、頑張ってもらいたい。

(小南教育長)

- ・委員の皆様のご意見に深く共感し、非常に参考になった。
- ・なお、その溝口委員からのご発言にもあった料理活動に関しては、すでに公民館で中学生や小学生を対象にした料理教室を企画しており、広報にも取り上げてもらっている。昨年の、かこてらすでの料理実習も非常に人気があったので、今年から子どもたち向けに取組を始めたところである。

- ・また、神戸市が令和8年度から部活動を廃止し、土日の活動を民間事業者に委ねるという決断をしたことを知り、加古川市も目標を明確に定めて、いずれは同様の決断をする時期が来ると感じている。
- ・農業活動や福祉施設での取組など、子どもたちにとって意義のある活動をもっと考え、そうしたメニューを充実させることができればと期待している。これを機に、加古川市も新たな方向へ進めるよう検討を進めていきたい。

(岡田市長)

- ・次に、インクルーシブな教育環境の実現についてご意見を伺いたい。現場の先生たちは、多様な生徒への対応に本当に苦勞していると感じているが、インクルーシブ教育は国としても大切な理念であり、次期教育ビジョンでどのように反映されるのかを確認したいと思っている。

(土屋委員)

- ・インクルーシブ教育は特別支援を必要とする子どもたちだけのためではなく、生徒全体のための教育だと強く思っている。特別支援が必要な子どもたちを特別視するのではなく、当たり前存在として受け入れることができるのは、学校での経験が大きいと考えている。だからこそ、インクルーシブ教育はすべての子どもたちにとって大切だと感じている。

(岡田市長)

- ・土屋委員のおっしゃるとおりだと思う。これは人権教育とも深く関わるテーマであり、生徒たちがお互いの違いを当たり前のこととして認め合い、尊重し合いながら共に学べる場を作ることが何よりも大切だと思っている。
- ・ぜひ、このような考え方を教育ビジョンに大きく掲げ、しっかりとまとめていただきたい。

(岡田市長)

- ・最近よく話題に上がる子どもたちの意見表明や意見の反映について話したい。部活動の地域移行のアンケートで「料理」が人気だったことを聞き、大人が気づいていなかったことを反省している。子どもたちの希望や悩みをしっかりと聞き取り、教育ビジョンの中に反映させることが重要だと考えている。
- ・次期教育ビジョンについては、ぜひ子どもたちの意見を聴いたうえで、策定いただきたいと考えているが、教育委員の皆様の意見をお伺いしたい。

(土屋委員)

- ・子どもたちの意見を取り上げる際、多数決で決めるのではなく、慎重に扱ってほしい。必要な意見をしっかり拾い上げる形で聴取することが大切だと感じている。

(坂元委員)

- ・子どもたちは意外とよく物事を見ている。だからこそ、意見をきちんと取るべきだが、その後の大人の判断も重要だと考えている。多数決ではなく、大人として譲れない部分はしっかりと守りつつ、アンケート結果をそのままにしないようにしてほしい。

(播委員)

- ・自分たちの世代は、考え方が少し古いかもしれないが、それでも大切にすべきことがあると感じている。日本国憲法で平和教育が重視されているように、戦争や震災といった過去の経験は、子どもたちに必ず伝えておかなければならない。年月が経つにつれ、こうした体験が風化していくことを懸念している。
- ・だからこそ、子どもたちの意見を尊重しつつも、昔の経験や教訓をしっかりと伝え、両者をうまく結びつけることが大切だと考えている。語り部の活動のように、過去の経験を伝える場を設けながら、それを踏まえて子どもたちの意見を反映させる仕組みが必要だと思っている。

(溝口委員)

- ・最近の子どもたちは、プレゼンテーションやコミュニケーションの能力が非常に高く、自分の意見をしっかりと表現できる子が増えていると感じている。例えば、パリオリンピックで金メダルを獲得した14歳の選手のように、若い世代は大人顔負けの力を持っている。
- ・加古川市でも中学生が生徒会を通じて校則について協議する場を持っているが、こうした活動は非常に意味があると考えている。だからこそ、子どもたちの意見をしっかりと吸い上げ、彼らが本当に感じていることや希望を積極的に取り入れることが大切だと思っている。
- ・子どもたちの声を尊重し、学校や地域でその意見を反映させる仕組みを作ることが、今後の教育にとって非常に重要だと感じている。

(岡田市長)

- ・委員の皆様の意見に感謝する。これまでの取組では、子どもの意見の反映が十分でなかったのではないかと反省もある。そのため、教育ビジョンの中では、子どもたちの意見を積極的に取り入れることを強く意識し、それが実際にどのように反映されるかを明確にしていきたい。

- ・また、大人が伝えるべき大切なことと、子どもたちが自ら考え、意見を持つことのバランスをとりながら、教育の現場に反映させていくことが重要だと改めて感じたところである。

(岡田市長)

- ・第4期加古川教育ビジョンがまとまった後、地方自治体の長に策定が義務付けられている教育大綱の改訂に取り組む必要がある。

これまで教育委員会と培ってきたコミュニケーションを大切にしつつ、今日の議論で出た意見やアイデアをしっかりと教育ビジョンに反映させていただきたい。その上で、私たちの目指す方向性に合致していることを確認できれば、教育ビジョンそのものを教育大綱とさせていただきたい。

(小南教育長)

- ・本日の協議は非常に実り多いものだったと感じている。今後、岡田市長の思いや考えをしっかりと反映させた教育ビジョンを作り上げていく予定である。
- ・教育ビジョンの完成は年明けの2月下旬を予定している。その後、総合教育会議で報告する場を設けるので、ご確認いただきたいと思いますと考え、教育委員の皆様のご意見をお伺いしたい。

(各教育委員)

- ・異議なし

(岡田市長)

- ・それでは、次期教育ビジョンについては、次回の総合教育会議でしっかり確認させていただき、教育大綱の策定についてもその方向性で進めていきたいと考えている。
- ・私たちの共通の目標に向かって、協力し合いながらこの重要なプロセスを進めていきたい。皆様の協力を得て、加古川市の教育をより良いものにしていきたいと思っているので、どうぞよろしく願います。

○閉会 午後3時42分